



永井 康雄

NAGAI Yasuo

三菱商事代表取締役常務執行役員

関西支社長

「三菱」創業の地



「三菱」と聞いて皆さんは何を思い浮かべますか。創業者・岩崎彌太郎や「東京・丸の内」をイメージする方が多いのではないでしょうか。そしてほとんどの方は「三菱は東京の会社」と思っておられるのではないかでしょうか。私も入社前はそう信じて疑っていませんでした。

三菱の歴史は、1870(明治3)年、大阪で私商社「九十九商会」が設立され、借り受けた藩船3隻で土佐藩の海運・貿易を引き継いだことに始まります。政府の藩営事業禁止の方針や藩の緊縮財政政策をふまえてのことでした。大阪藩邸の最上席者だった彌太郎が経営を監督しましたが、やがて彼は官を辞し、純民間人として九十九商会のオーナーになります。つまり、三菱創業の地は“大阪”なんです。彌太郎は海運事業を積極的に展開し、73(明治6)年には社名を「三菱商会」と改め、74(明治7)年に東京の南茅場町に本社を移転します。その後、現在の丸の内の原型となる東京駅前の開発を手がけるなど事業を拡大し、東京で三菱グループは大きくなっていました。しかし、三菱が事業を立ち上げたのは紛れもなく大阪。関経連の会員の皆さんにはこのことをぜひ知っていただきたいと思います。

三菱が大阪発祥である証の一つとしてご紹介したいのが、大阪の北堀江にある土佐稻荷です。古くから土佐藩の蔵屋敷にあり、山内家が大阪の守護神とした神社で、後に岩崎家が自分たちの守護神として引き継ぎました。彌太郎も朝な夕な商船の無事を祈ったと伝えられています。今は、グループ28社の会長・社長の会である三菱金曜会が運営をバックアップし、グループ各社の幹部が毎年、年初に大阪に来た際に参拝する、三菱の精神的支柱となっています。

三菱にはもう一つ精神的な支柱があります。それが「三綱領」です。4代目社長・岩崎小彌太の訓示をもとに1934

(昭和9)年に「所期奉公」「処事光明」「立業貿易」としてまとめられたもので、三菱グループ各社にとり、時代を超えた共通理念となっています。三菱商事ではこれを企業理念とし、国の内外を問わず、すべてのトップの部屋に小彌太の筆による「三綱領」を掲げています。その今日的な解釈は次のとおりです。

所期奉公：事業を通じ、物心共に豊かな社会の実現に努力すると同時に、かけがえのない地球環境の維持にも貢献する。

処事光明：公明正大で品格のある行動を旨とし、活動の公開性、透明性を堅持する。

立業貿易：全世界的、宇宙的視野に立脚した事業展開を図る。

今の企業経営にも通じるこれらの言葉は、約80年前に制定されたとは思えないほど少しも色あせていません。あらためて言葉の重みを感じます。

関西支社長としても、三菱創業の地・関西の経済は気になるところですが、関西広域連合、うめきた、関西イノベーション国際戦略総合特区など元気な芽が出てきています。しかし日本の持続的な成長には、関西がもっと力をつけることが必要です。そのためにも、関西の発展を支えるインフラや物流といった分野でこれまでわれわれが培った力を發揮し、関西の成長に貢献したいですね。また、技術力のある関西の中堅企業が海外進出を検討する際に現地の生の情報を提供したり、実際の進出をサポートすることも今後手がけていきたいと考えています。大阪・関西に浅からぬ縁のある企業として、こうした役割を果たすことが「三綱領」にもかなう、われわれの行く道だと思っています。

(談)